

# FADO

# 11

Junho 1996

月田秀子ファド倶楽部

## TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL

D

### 月田秀子の昨日、今日、明日…

終わった。何はともあれ、二日間50曲近くの歌を歌い終えた。今日もらったひまわりが首を垂れている。拾ってきた大きな寸銅鍋の中で明日は息を吹き返すだろう。満月の夜。眠れない夜。ステージであれだけ吠えたのに、心はまだ眠ろうとしない。

幕は降りたというのに、来るべき開幕の時を思い心はおののく。ひたすら走ろうとする我が心。

大阪・バナナホールでの二日間の『きまぐれライブ』は、盛況の内に幕を下ろしました。皆様の熱いご声援ありがとうございました。前売り状況はかんばしくなかったのですが、当日券でのご来場の方が多く、一部ご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。

1988年、ポルトガルから帰国以来、かたくなにファド一筋で歌い続けてきた。今回はファドの伝道者としての荷を下ろし、ジャンルを問わず、私の心が素直に歌える歌に挑戦してみた。プログラムの半分はファド。

28日<PART I>では、野上圭三氏の、ギター、チャランゴ、オカリナ等の演奏を交えて月田自身もギターを片手に歌う南米のフォルクローレを皮切りに、土の香り、人間への、生きる事へのたぎる思いを素朴に歌い上げたいと思った。

30日<PART II>では、ジャズピアノの大塚善章氏の協力を得て、かつて、歌っていたシャンソンから、「歌は生きてあることの叫びであり、生きることへの祈り」という思い入れで、ピアノの弾き語りでごospelソングまで登場した。

他ジャンルの歌を歌うことで、ファドが見えてくるのではないか。何よりも私自身の求める歌が…。聴く人にとっても、同様かもしれない。そんな気がしていた。

彷徨の一過程としてでしかなく、新たなさすらいへの旅立ちの一幕として、『きまぐれライブ』は、幕を下ろした時点で、幕が上がった。

年一回、こんな風に、『きまぐれ』なライブをしてゆく

つもりです。月田に歌わせたい歌等リクエストがありましたら、どしどしご意見ご希望をお寄せください。内容によってはお応えできないこともあるとは思いますが、そこはご了承の程。大阪以外の所でも開催したいと思っています。経済力、企画力、実践力ないないづくしの月田にご協力お願いします。

月田秀子

<6月28日演奏曲目>

黒いオルフェ  
自由の歌  
平和のシンボル  
丘の上のあばら家  
ファドインストゥルメンタル  
どんな雨で  
あなたにファドを  
街の少年  
悲しいポルトガル  
不如意  
初恋  
黒の母  
アンデスの風になりたい  
ツクマンの月  
花祭り  
わが影のビターラ  
人生よありがとう  
灰色の瞳  
時計  
ピアノソロ  
孤独  
折り  
イマジ  
難船

<6月30日演奏曲目>

ジャニーギター  
失われた恋  
スカーフ  
かもめ  
さくらんぼの実る頃  
水に流して  
愛しくない時  
私の孤独  
消え去りし友  
帰り来ぬ青春  
時は過ぎて行く  
(AS TIME GOES BY)  
サマータイム  
ピアノソロ  
ポルトガルの洗濯女  
川辺の民  
二つの栄光  
リスボン匂い  
アルファマ  
暗いはしけ  
難船  
私の中のファド  
夕べの折り  
歌に悪かれて  
イマジ

## 〈臨時マネージャー奮闘記〉

5月24日午前10時10分、新大阪駅中央改札口に、私は立っていた。

昨年、私は初めて、月田秀子さんのファドを聴いた。橋本市で催されたサロンコンサート、広くない会場の中央に、二人のギタリストを伴って立つ月田さんの姿は、行ったこともないポルトガルの風をまとっているような気がした。ファドを、そんなに沢山聴いていたわけではなかったけれど、月田さんはファドを歌うために生まれてきた人みたいだ、と感じた。酔わせてもらった。五木先生に聴いていただきたいと思った。五木先生とファドも、切っても切れない縁(えにし)がある。「哀しみのフローレンス」(映画「戒厳令の夜」の主題歌)は、私の大好きな歌だし、日本が生んだファドの名曲だ、と常々誇りに思っていた。歌唱こそアマリアロドリゲスだが、和製ののだ。勿論、五木先生は、月田さんのことをご存知で、ラジオ番組でも取り上げられたこともある。

そして、運命の日が来た。日刊ゲンダイ掲載の「流されゆく日々」5000回を記念した論楽会が、水道橋パンセホールで開催される1週間前の5月18日、五木先生は、和歌山県御坊市で講演をされた。講演のあとのわずかな時間に、私は特に何の脈絡もなく、月田さんの話をした。「いつか、先生のラジオ番組に月田さんをゲストに招いてください」そして、「彼女に「哀しみのフローレンス」を歌ってもらいたいのです」と。そのあとの先生の発言に私の心臓がバクンと躍った。「25日の論楽会に、月田さん出演してもらえないだろうか。田中さんから交渉してみてください」「ハイ、責任をもって交渉いたします」と、即答した。その日のうちに、月一度、月田さんがライブをしている東心斎橋のアートクラブに電話をかけた。播本さんという女性が、月田さんは今、山口へ仕事で出掛けていて、明日の夜しか連絡がとれない、と教えてくれた。播本さんのご助力もあって翌日、ご本人と連絡がとれた。受話器からは、あの声、ファドとファドの間に、ひとり言みたいにつぶやく語りの声の流れが流れてきた。ああ、憶えている、この声。顔はもしかしたら街で出会っても判らないかもしれないけど、この声は判る。そんなことを思いながら、突然降って湧いたようなお願いを申し出た。5月24日に上京してもらい、TBSラジオの「五木寛之の夜」に、ゲスト出演して頂き、翌日の論楽会で歌っていただけないでしょうか、と。月田さんは、どこの誰とも分からない私の話を真剣にきいてくださり、そして快諾してくださった。ただし、伴奏のギターさんに、予定が入っていないか確認をとってみる、とのこと、急に不安になる。ファドの伴奏には、ポルトガルギターが不可欠で、もしギターさんの都合がつかない場合は、アウトである。折るような気持ちで、月田さんからの電話を待つ。すぐに電話が鳴った。月田さんからだ。ギタリスト二人ともOK、ただし25日のみ日帰り、ということだ。何も問題はない、伴奏が必要なのは論楽会なのだから。この連絡を受けて文芸企画、小村さんに電話をする。話は音をたてて進化した。月田さんの略歴、顔写真新しいCDのタイトル、発売元等々、やつぎばやに電話連絡が続く。月田さんには、当日の会場につ

いて、他の出演者の顔ぶれ、歌う曲数、などの情報を伝える。その結果、私が月田さんのお供をすることになった。

5月24日午前10時10分、新大阪駅中央改札口で、私と月田さんは初めて顔を合わせた。

月田秀子さんは、やはり黒ずくめの服装で颯爽と私の前を通り過ぎた。プライベートの月田さんは、私には想像もつかなかったが、やはり、黒、なのだ。と納得しながら声をかけた。あとでうかがったことなのだが、月田さんも、どんなおぼさんが現れるのか、想像できなかつたらしい。八角弁当を手にした私は、2日間ご一緒させていただくご挨拶をして、ひかり号に乗った。少し早めの昼食をとりながら、二人の話は弾んだ。不思議なことに、共通の知人が何人かいたりして、人の往来は必ず輪になるのねえ、とうなずき合ったり、彼女自身のこと、歌のこと、あ、れんげ畑！と、休む間もなく話しつづけ、もう着いたね、と言いながらホームに降り立った。

東京駅からタクシーに乗り、今夜の宿舎東京プリンスホテルに向かう。タクシーの中はムツと熱気がつまっていて、急いで窓をあける。ホテルは東京タワーの足元、芝公園の中に入り深緑につつまれている。チェックインのあと、部屋で簡単に荷物を整理して下へ降りる。2時30分に、ホテルの「ピカケ」という喫茶室で、五木先生との打ち合せが始まるのだ。フロアから一段高くなったオープンスペースの「ピカケ」には、打ち合せの席が用意されていた。大きな鞆を2つ携えて、五木先生は姿を見せられた。先生は開口一番、「月田さんにはいつか、お目にかかれると思っていました」と、おっしゃり、初対面の月田さんの気持ちがフッとほぐれたような気がした。これから向かうTBSラジオの収録の打ち合せ、そして明日の論楽会の打ち合せが、早いテンポで進められ、そのまま玄関で待っていた車に乗って赤坂に向かった。文芸企画の小村さんの運転する車はスムーズに小さな街角を曲がって行く。都内を熟知している人の運転だ。他のテレビ局もそうかも知れないが、TBSのチェックは厳しいような気がした。当日だけ通用する札を片手にエレベーターに乗る。エレベーターを降りたところに椅子とテーブルが置かれたコーナーがあり、そこで出演者の写真が撮られる。月田さんをはさんと、五木先生とアシスタントの柳さんが座られ、フラッシュとシャッターの音が飛び交う。カメラマンの石山さんにお目にかゝるのは、有楽町マリオンでの論楽会以来だ。相変わらずスリムでお元気そうだ。その写真は、カネボウの冊子「Bell」に掲載される対談用のものだろう。3人がスタジオに入られたあと、石山さんとゆっくりお話ができた。石山さんは、郡山市に住む友人の紹介で月田さんを知り、ずっと応援をしてきたという。折りにふれて五木先生に、月田さんのことを話したり、テープを渡したりされたことが、今回の出演に結びついたので納得した。石山さんは、論楽会に、月田さんの出演が決まったと知った時、何故か頭の隅で私の顔が浮かんだらしい。不思議な感性の世界である。石山さんと2人、足音を忍ばせてスタジオに入る。簡単な打ち合せの後、すぐ本番。五木先生は何の気負いもなく、いつもラジオから流れてくるあの声で「今晚は、五木寛之です」と話された。もう17年も続いている番組だから、どこかいきつけ

の喫茶店の片隅で、思いつくままおしゃべりを楽しんでいる、そんな雰囲気がある。でも、そうではない、と私は思う。先生の中には、適度な緊張感と、大きなところから見た構成と、ゲストの魅力を引き出す計算が、ちゃんと根ざしているに違いない。月田さんも、的を得た話し方で、彼女らしさを損なわず、私は思わず、うん、いい、とガラス越しにつぶやいていた。「はしけ」の原曲はブラジル生まれであること、日本人がポルトガル人にはなれないのだから、日本人のファドでいいのだ、ということなど話は佳境に入る。間に月田さんの歌2曲が挿入され、収録は終わった。

ホテルに戻ると、石山さんからのメッセージ、夕食ご一緒にしませんか、のお誘いだ。そう言えば、お腹空いたなー。3人で、有楽町のガード下へくり出すことになった。夕暮の風がとても優しい。金曜日の夜とあって、ヤキトリ屋さん空席はなかなか見つからない。「炉端」という店をのぞいてみる。高野山のふもと天野の里で作陶をしている森岡さんの大鉢がいくつか見える。是非入ってみたいと思ったが、こども満員。又、煙の中を空席を探して歩く。石山さんが、カウンターの隅っこに3つの椅子をみつけ、とりあえずそこに坐る。生ビール3つと、ヤキトリの盛り合わせ3人前。女3人は、食べるよりもおしゃべりに時を忘れ、奇遇な出会いを喜び合った。もう一人、3人共通の知人、「みさおさん」と次は4人で会えるよう、いつかわからない約束をした。

フッ、と何かの気配で目が醒めた。窓によってカーテンをあける。東京の朝だ。丁度目の高さに朝日があつた。厚い霞を通して、朝日にまぶしい輝きはなく、印象派の絵のようなやわらかい太陽だ。時計を見ると5時すぎ、歳のせい目だけは早く醒めるようになった。窓から下の駐車場をぼんやり眺めていると、黄色いタクシーが一台、ホテルの玄関に向かってスピードを落としている。右手には数台のハイヤーが待機していて、人の動く気配も見える。ゆっくり、ゆっくり目醒めてゆく都会は、低血圧なのかもしれない。

11時すぎ、チェックアウトを済ませ、月田さんと「ピカケ」で先生方をお待ちする。小村さんの運転で、会場に向かう。事前のチェックが怠りないので、小村さんは迷わずバンセホールに車を横付けする。早速、スタッフの顔合わせ、舞台でのリハーサルと続く。今日のゲストは作家の村上龍さん、フォルクローレのソッコ・マージュさん、飛び入りの形で山川健一さん、そして、月田秀子さんだ。控え室では、プレゼント用の本が用意されていて、先生はサインに忙しい。月田さんも、昨年ポルトガルで録音した新しいCD「ファド・メノール」15枚にサインをいれる。11時ころ、大阪からギターさんお2人が到着。舞台上で本格的なりハーサルに入る。舞台の中央に、丸いテーブルが置かれ、2つの椅子の一つに五木先生が座られている。ハンドマイクで先生が話始められ、「今日のゲスト、月田秀子さんをご紹介します」という言葉に重なるようにギターの演奏が始まる。心の琴線をつまびくと、こんな音かしら、と思えるようなポルトガルギターの音色に期待感は一層膨らんでくる。上手、黒い幕のすきまから静かに月田さんが現れ、一曲目を歌いだす。「二つの栄光」という曲だ。始めの3曲は、五木先生と月田さんで決められ、アンコール曲は月田さんの一番好きな曲を、ということになっている。論楽会で4曲とは、異例のこ

とだ。衣装もリハーサルで着ている普段着のままの方がいい、という五木先生の意見を取り入れて、月田さんが用意してきた黒いドレスは鞆に逆戻りすることになった。

月田さんは「うれしい」とつぶやく。「先生は、ファドをととてもよくわかっていらっしゃる」

論楽会は3時から始まった。客席400の会場、後には立ち見の人もある。一部五木先生のお話、二部月田秀子のファド、三部村上龍、山川健一、五木先生の対談、一今、一番好きな音楽など一そして、ソッコ・マージュの弾き語り、と3時間20分の長丁場となった。最後に、五木先生の提案で、ソッコ・マージュさんと月田さんのジョイントが実現した。一見、水と油みただけけれどミスマッチの面白さが出るかも知れない、ということらしい。はじめ、キーが全く違うよ、としり込みをなさっていたソッコさんも、よし、やるか。「CANTARE, CANTARE, CANTARE」と2人の歌声が、会場に響いた。

お疲れさま、の聲が飛び交う中、打ち上げ会場へ向かう。8時前の新幹線に乗ることにしていた私は、7時15分には席を立たなければならなかった。月田さんは、私も田中さんと一緒に失礼するわ、とおっしゃった。五木先生は、少し疲れた表情ではあるけど、ホッとした優しいお顔をなさっていた。月田さんのお声をとても気に入ってくださったようで、私はとてもうれしかった。又いつか、先生とご一緒にお仕事ができることを、月田さんのために祈った。中座する私たちを、みなさんの声が送ってくれた。

「私にとって、重い2日間だった」と月田さんは、車の中でポツリと言った。いろんな思いが去来して、2人とも無口になっていた。東京駅で私は車を降り、友人に会うために残る月田さんにさよならを言った。又ね、と応えた月田さんの瞳が、キラリと光ったような気がした。

田中 真理子



五木文庫・和歌山



(左から、月田、五木氏/TBSスタジオにて)

